

## 日韓ワールドカップの思い出（その1）

鈴木将史

今年はサッカーWMの開催年である。11月にカタールで開かれるワールドカップに向けて、日本が7度目の出場を決めた一方、優勝4回を誇るイタリアが出場を逃したのは、ヨーロッパに較べ、アジアのぬるま湯ぶりを象徴するような結果であった。自称（他国はそうは見えていない）「死の組」に入った日本が、ドイツとガチンコでどこまで勝負できるか、興味も尽きないところだが、ここで20年前に日本が沸き立った「日韓ワールドカップ」フィーバーについて、私も些か面白い体験をさせてもらったのでご紹介したい。因みに、私は試合を直接には観戦していない。

2002年日韓ワールドカップは、不思議なことにそれまで対戦したことがないドイツとブラジルが決勝で相まみえることとなったり、日本と韓国が決勝トーナメントに進出するという（韓国は出来すぎだったが）「役得」を味わうこととなったりして大いに盛り上がった。グループリーグで最も注目されたカードは、文句なしにイングランドーアルゼンチン戦であり、それより丁度20年前の「フォークランド紛争」の当事者である両国の対戦に、サポーターたちは否が応にもヒートアップした。この試合の会場が札幌ドームだったのである。札幌ドームは、ワールドカップ会場を札幌に誘致するべく建設が進められたため、野球よりもサッカー試合開催を第一の目的にして建設された国内唯一のドーム施設である。（そして、来年からは日本ハムが去るため、コンサドーレのみのためのドームとして、落成当初の状態にまた戻る。因みに、このドームの愛称「HIROBA」を知る人はほとんどいない。）ここで行われた英亜戦であったが、丁度当時はイングランド発祥の「フーリガン」がサッカー界を席卷していた頃で、警察の警備体制も極限に達していた感があった。札幌ドームへと続く幹線道路は、歩道が「イングランドサポーター用歩道」と「アルゼンチンサポーター用歩道」に分けられ、両者は横断歩道でも接触しないように配慮されたという。試合の結果はベッカム率いるイングランドが、バティストウータを擁するアルゼンチンを1-0で破り、そのためポット1選出国の強豪アルゼンチンは、40年ぶりに予選落ちするという屈辱を味わった。ただ、この試合の陰に隠れてはいたものの、札幌ドームではもう1試合ワールドカップグループリーグが行われていたのである。それがドイツーサウジアラビア戦であり、この試合にまつわる私の体験報告が、本稿の眼目なのであった。（ただ、くどいようだが、私は試合を直接観戦していない。）

英亜戦に先立って6月1日に行われた独沙戦は、警察にとっては、警備体制における英亜戦の恰好な予行演習ともいえた。当時はドイツ・フーリガンも警戒さ

れており、そうした輩を抑え込むために、道警は水際対策として、新千歳空港に警戒態勢を敷いたのである。到着口からそれっぽい風貌（タトゥーやスキンヘッド）の白人男性が現れると、それとばかりに警察官が取り囲んで別室へ連行し職務質問を行う。当然通訳が必要になるが、これを私の後輩が務めることになった。空港に一日待機して5万円という、中々おいしいアルバイトで、質問マニュアルも当然の如く作成されていたそうだが、しかし、しょっぴいてきて質問する段で、開口一番 „Sind Sie Hooligan?“ などと聞くというのは、余りにもマヌケではあるまいか。結局怪しい外国人は現れず、通訳する機会は訪れなかったそうである。

さて、2002年は、本学では丁度学長選挙があった年で、それまで10年間学長を務めていた方（生物の先生）が、任期満了で改選となり、新たな学長が選出された。新学長は、就任の挨拶として海外の提携大学を訪問したいと言いつつ出たのだが、この先生の専門がドイツ行政法で、ドイツ語をこよなく愛する方だったため、行くのはドイツやオーストリアにある3大学だけで、イギリスやフランスはスルーするという。何とも身勝手な訪問先だが、ドイツ語圏のみの訪問だから、「鈴木さんも一緒に行かないかい？」と、誠に有難いお誘いを受け、私もいそいそと御同伴仕ることに相成った。逆さにしたってそんな金は出てこない、赤貧に喘ぐ今の大学法人から見れば、夢と見まごうばかりの優雅な国立大学時代であった。当時の国立大学教職員はまだ国家公務員なので、公務出張ということになり、利用したのは海老茶の公用パスポートである。我々に交付されたのは「一次旅券」と呼ばれる一回きりの使い切り旅券で、渡航先も記載されていた。学長は、別の機会に新千歳空港で北大の総長に邂逅したこともあったが（彼と当時の北大総長は、北大法学部の同窓生だった）、総長は使い切りではない「数次旅券」を持っていたそうである。さすが旧帝である。この旅券のせいだろうか、我々が乗ったANA便では、搭乗直前に学長の搭乗クラスがビジネスからファーストに格上げされた。彼はファーストクラスの濃密なサービスに酔ったようになって到着ロビーに現れたのだが（実際大吟醸酒をしこたま飲んでいて）、私のエコノミークラスはそのままだった。

そして、成田発フランクフルト行きこのANA便の搭乗日が6月1日、そう、ドイツーサウジアラビア戦当日だったのである。キックオフは午後8時半だったが、午前11時35分に成田を離陸したので、11時間強のフライトの最終盤に札幌で独沙が戦っていたことになる。乗客の約半数はドイツ人であったのだが、当然この試合の行方は皆気にかかっていたのだろう。機内はなんとなくそわそわと落ち着かない様子であった。フランクフルト空港には現地時刻で午後4時15分に到着。計算ではその約1時間前に試合は終了していたことになる。だが機内ネット環境は今ほど進化してはならず、携帯電話も使用禁止であるため、誰も試合結果を知る

ことはできない。そのようにはがゆい状態で機は滑走路に着陸したわけだが、日本のキャリアではそこでお馴染みのアナウンスがかかる。「皆様、当機はただ今フランクフルト空港に着陸いたしました。当機はしばらく滑走を続けますが、安全のため機体が完全に停止し、ベルト着用のサインが消えるまで、お座席についたままお待ちください…」続いて、ドイツ語で同内容のアナウンスが繰り返される。ただ、この日だけは „Übrigens…” ときて、少しだけおまけがついた。恐らくコックピット内で、管制塔との連絡中に速報がもたらされたのだろう。ドイツ語の言い回しは忘れたが、確か次のような内容だったかと思う。「なお、先程終了いたしましたサッカーワールドカップグループリーグ、ドイツーサウジアラビア戦は、ドイツが8対0で勝利いたしました。」さあ、 „mit 8:0 gewonnen!” という台詞が出た瞬間、客席のあちこちから一斉に „Bravo!” の声上がり、機内では喜びが爆発した。それから皆、笑顔、笑顔で、ドイツ人乗客たちは、出口でCAとハイタッチをしたりしながら機を降りていったのだった。(その2に続く) (小樽商科大学教授)